

～チェルノブイリ原発事故から20年～

放射能汚染地帯に今 何が起きているのか！

2006年4月26日は、チェルノブイリ原子力発電所爆発事故からちょうど20年目にあたります。世界を震撼させた事故の影響は20年たった今でも深刻な状態あります。世界は再び原子力拡大の方向に動き出しており、全世界で400基以上、日本はそのうち55基を保有する世界有数の原発大国になりつつあります。原子力災害が私たちに一体何をもちたらすのか、20年後のチェルノブイリの姿を報告します。

不気味に急増する思春期甲状腺ガン

小児性甲状腺ガンの問題

表のBのグラフを見ると、チェルノブイリ原発事故後、3年経過したあたりから小児の甲状腺ガンが急増していることがわかります。ベラルーシでは小児の発生率は年間100万人当たり一から3人でした。それが**事故後、3、4年間で急に増大し始め、十倍から数十倍に上昇**しました。そして、そのピークは8から10年後に現れ、1995年に最高の発生率を記録した後は徐々に下降しています。人の成長期に活発に活動する甲状腺は、小児の時期に放射線に大きな影響を受けるのです。甲状腺の活動に欠かせない物質にヨウ素と呼ばれる物質があります。小児の時期はこのヨウ素を大量に取り込むのですが、**原子力事故ではこのヨウ素が放射能を帯びた「放射性ヨウ素」とよばれる物質が大量に放出**されます。空気中や水、食料に飛び散った放射性ヨウ素は、小児ほど体内に取

り込んでしまうのです。チェルノブイリ原発事故で放出された放射性ヨウ素は、まず子どもの甲状腺にガンを引き起こしたのです。しかし、放射性ヨウ素の半減期は1週間と短いため、チェルノブイリ原発事故の後、一週間で降に生まれた子どもへの体内には取り込まれることなく影響はほとんどないといえます。

表Bが示す通り、小児性甲状腺ガンの発生率が年々、減少しているのは原因物質である放射性ヨウ素がほとんどなくなっているためです。**泊発電所周辺地区には、保健所・学校などにヨード剤を保管しているのは、事故が発生した場合、子どもたちが放射性ヨウ素を取り込む前に、人為的にヨウ素を体内に入れてしまうためです。**

思春期甲状腺ガンの問題

小児甲状腺ガンの発生は、当初から予想されていましたが、予想外に急増しているものがあります。思春期の年齢にさしかかった人たちの甲状腺がんです。**チェルノブイリ原発の事故当時、2歳から5歳だった人の甲状腺ガンの発生率がここにきて急速に増加**しているのです。

このグラフによれば、1995年には10万人に対して4、0人だった発生率が、1999年には6、6人、2000年には10万人に9、5人の割合で甲状腺ガンが発生しています。

15歳から18歳の思春期という世代。それはまさにこれから大人になり、女性であれば子どもを授かり、母親になっていく年齢です。思春期は人の成長過程で、甲状腺の肥大が最大になる時期です。子どもから大人へと体全体が変わり始めるこの時期、甲状腺も最も大きくなろうとします。特に、この時期の女性は妊娠、出産が可能な時期を控え、ほとんどの内分泌ホルモンが完成する大切なときです。この**大切な時期に甲状腺がガンに侵される**ということは、**次世代の赤ちゃんにも重大な影響がでることが心配**されます。

人の健康にとって基本的に、最も大切なホルモンを作る甲状腺という器官。チェルノブイリ原発事故が残した問題は、依然としてその重要な器官に残り続けているのです。

子どもから、思春期、さらに、新しく生まれてくる生命にまで、影響が及ぶ甲状腺ガン。ベラルーシなどの汚染地帯では、20年たった今でも片時も油断できない状況に陥っているのです。

悲劇のリグビダートル

チェルノブイリ原発事故の処理を行った若い軍の兵士たちをリグビダートルと呼びます。彼らは高濃度に汚染された場所で放射線にさらされつづけました。その結果、20年を経過した今でも、ガンによる死亡者は不気味な上昇を続けています。結腸ガンや肺ガン、膀胱ガン、甲状腺ガンなども多発している。**40代に入って次々とガンを発病し死んでいくリグビダートルが今急増**しています。

ちぎれる染色体

放射能の深刻な影響の一つに、遺伝子を破壊することが知られています。右の写真は、汚染地帯の人々の染色体（遺伝子）を調べたものです。健康な人は同じ形のものが一組ずつありますが、この人の**染色体のいくつかはちぎれており、異常な状態**になっています。

染色体の異常は、子どもから孫へと引き継がれていくこととなり、極めて深刻な問題を残します。

原子力は強大なエネルギーを生み出します。しかし、その一方で、事故が発生すれば大地も人も動物も植物も水も空気も、あらゆるものが汚染されてしまうエネルギーなのです。

